平成２５年度研究成果報告書《平成 25 年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	4	都道府県・指定都市名	宮城県
学校名（ふりがな）	宮城県 泉 高等学校（みやぎけんいずみこうとうがっこう）		
（生徒数）	（844 名）		

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地：〒981-3132　宮城県仙台市泉区将監 10-39-1
電話番号：022-372-4111
研究内容等を掲載しているウェブサイトの URL：http://www.izumihigh.myswan.ne.jp

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：４高等学校
○研究対象教科等：外国語（「コミュニケーション英語Ⅰ」）
○研究のキーワード：４技能統合型，定期考査問題の改善，スピーキング能力の育成，スピーキング能力を評価する学校独自テストの開発
○研究成果のポイント：　生徒が積極的に英語を用いてコミュニケーションを成立させようとする意欲を持つようになるとともに,様々な場面で即興的に英語を発話する姿勢が定着した。

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題

４技能統合型の授業におけるスピーキング能力の育成に焦点を当てた指導と評価の研究開発

（２）研究主題設定の理由

本校は，各学年普通科６クラスと英語科１クラスで構成され，平成 18 年度からの３年間，英語科において「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」（SELHi）の指定を受けたことも生かして英語教育に力を入れ，国際性豊かな教育を目指している。

平成 25 年度の課題は，英語科に比べて外国語の履修単位数が少ない普通科において，SELHi での研究成果を踏まえつつ，生徒のコミュニケーション能力を効果的に育成していくことである。本研究においては第１学年を主な対象とし，４技能統合型の授業を実践しながら，特にスピーキング能力の育成に焦点を当てるとともに，その能力を適切に評価する方法を開発して実践する。

（３）研究体制

研究対象科目である「コミュニケーション英語Ⅰ」の指導と評価は，教頭１名，教諭２名，常勤講師１名の計４名で担当する。教頭が１クラス分の授業を担当し，研究が着実に実践されるよう他の担当者と指導方針等を共有しながら進めていく。常勤講師は，本研究の計画・実施に関わるとともに，主担当者とティーム・ティーチングを行い，特にスピーキング活動が活発に行われるよう生徒の言語活動を支援する。

（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	・４月～６月：第１回意識調査，４技能統合型の授業実践，インプットとアウトプットを一体化させたスピーキング活動，定期考査問題の改善，スピーキングテストの研究開発と実施 ・６月～９月：第１回スピーキングテスト（試験的に HOPE を実施），第１回授業公開，第２回意識調査 ・10 月～11 月：第３回意識調査，４月から９月までの研究の見直しと改善 ・12 月～３月：第４回意識調査，第２回授業公開，第２回スピーキングテスト（学校独自テストを実施），GTEC for STUDENTS による英語力検証，第５回意識調査

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

① ４技能統合型の授業実践

各クラスで４技能統合型の授業を展開するためには,指導や評価について学年共通の方針が必要となる。初期の段階においては教頭が中心となり，単元ごとの目標と指導内容を他の担当者と共有するとともに，共通ハンドアウトの作成・使用から研究を開始した。その後，７月の授業公開実施時点で，各担当者はそれぞれの個性を発揮しつつ，どのクラスでも４技能統合型の授業を効果的に実践できるようになった。

② 定期考査問題の改善

上記①の実践を適切に評価するため,普段の授業から指導と評価の一体化を意識した。その総括として，定期考査問題の改善を図った。主な改善内容は，「聞くこと」，「読むこと」及び「書くこと」の能力を測るために，授業で指導した内容を，授業内で使用したものとは異なるコンテクストにおいて試すことであった。具体的には，各定期考査の約６割を初見の英文とし，単なる暗記テストとならないよう留意した。

③ スピーキング能力の育成

研究開発当初は，スピーキングによる表現活動の定着が課題であった。試行錯誤を繰り返しながら，各担当者は，即興性を重視したスピーキングによる表現活動を徹底的に実践し続けた。その結果，12 月の時点で，高等学校における基礎的なスピーキング能力を身に付けさせることができた。ここで言う「基礎的なスピーキング能力」とは，日常会話において，相手からの情報や考えなどを的確に理解し，自分の情報や考えなどを適切に伝えようとする姿勢に基づくものである。すなわち，使用言語の正確さに加え，コミュニケーションを図ろうとする意欲が重視される能力を示す。

④ スピーキング能力を評価する学校独自テストの開発

６月末から７月上旬にかけて，第１回スピーキングテストとして，HOPE（High School Oral Proficiency Examination）をほぼそのままの形で試験的に実践した。しかし，HOPE の評価規準に基づく評価では文法ベースに陥りがちになり，コミュニケーションを図ろうとする意欲を測ることが困難であった。このことから，スピーキングによる表現活動に不慣れな本校生徒のスピーキングに対する意欲も測るために，12 月に学校が独自に作成した第２回スピーキングテストを実施した。ただし，このスピーキングテストにはまだ改善すべき点が多く，今後も研究を進める必要がある。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果

４技能を統合的に指導した結果，生徒はバランスのとれた基礎的な英語力を身に付けることができた。また，スピーキングに焦点を当てた授業改善が，生徒の英語を用いてコミュニケーションを成立させようとする意欲の喚起につながった。さらに，研究対象となった生徒のほぼ全員が，英語による質問に対して，手元に参考とするものが特に何もない状態であっても短い英語で答えることができるようになり，即興的に英語を発話する姿勢が定着した。

（２）研究成果の意義等

一般的な高校生を対象とした４技能統合型の指導による基礎的な英語のスピーキング能力を定着させる指導の在り方は，全国的にも汎用性が高く，意義があるものと思われる。

（３）指定期間終了後の取組

平成 25 年度の実践は，高等学校入門期の英語教育に係る研究であった。今後は，生徒が身に付けた基礎的なコミュニケーション能力を発展させることにより，ある程度長く，やや複雑な表現を織り交ぜながら，英語としてより適切で豊かな発話ができるよう指導していく。なお，今年度は指導の実践に終始し，評価面での取組を深めることができなかったため,評価の充実による指導の更なる改善を行っていく必要がある。